資料9

宗像市立玄海小学校・玄海中学校施設一体型
小中一貫校開校基本コンセプト「一次案」

宗像市教育委員会

平成23年4月

玄海小・中学校開校基本コンセプト

宗像市教育委員会

開校基本理念

平成 18 年度より宗像市が推進している小中一貫教育について、平成 23 年度より玄海中学校区の４校は調査研究校としてその推進を担うことになる。また、学校施設において平成 25 年度玄海小学校は、施設一体型の小中一貫教育を展開するために玄海中学校内に移転する計画である。これまで、本市の小中一貫教育は、7 中学校区の内、僻地離島にある大島小中学校だけが施設一体型であり、他の 6 中学校区は施設分離型、隣接型である。施設一体型の小中一貫教育の効果は、この大島小中学校の研究によって、9 ヵ年を通した児童生徒の学習意欲の向上や中１ギャップの解消、それに伴う学力の向上等で確実な成果として証明されている。このような施設一体型の小中一貫教育が展開できる今回の玄海小学校の移転には大きな期待があり研究の成果が待たれている。特に、現在ある玄海中学校の敷地内に玄海小学校を新設するという小中一体型の施設に特色を持たせているので、その活用を十分に考慮して①児童生徒の日常的、意図的な交流による人間関係調整力の向上、生徒指導上の課題の克服　②9 ヵ年を通した教育カリキュラムの開発によって期待できる児童生徒の自尊感情や学習意欲、学習能力の向上　③小中一貫教育を支える家庭・地域の教育力の向上について研究的に究明する学校として位置づける。

このように、玄海小・中学校の開校にあたっては、今後の宗像市小中学校教育のあり方を究明していく重要な役割を持たせ本小中一貫教育の一層の推進に寄与できる学校とする。

１．目指す学校像と実現のための研究課題

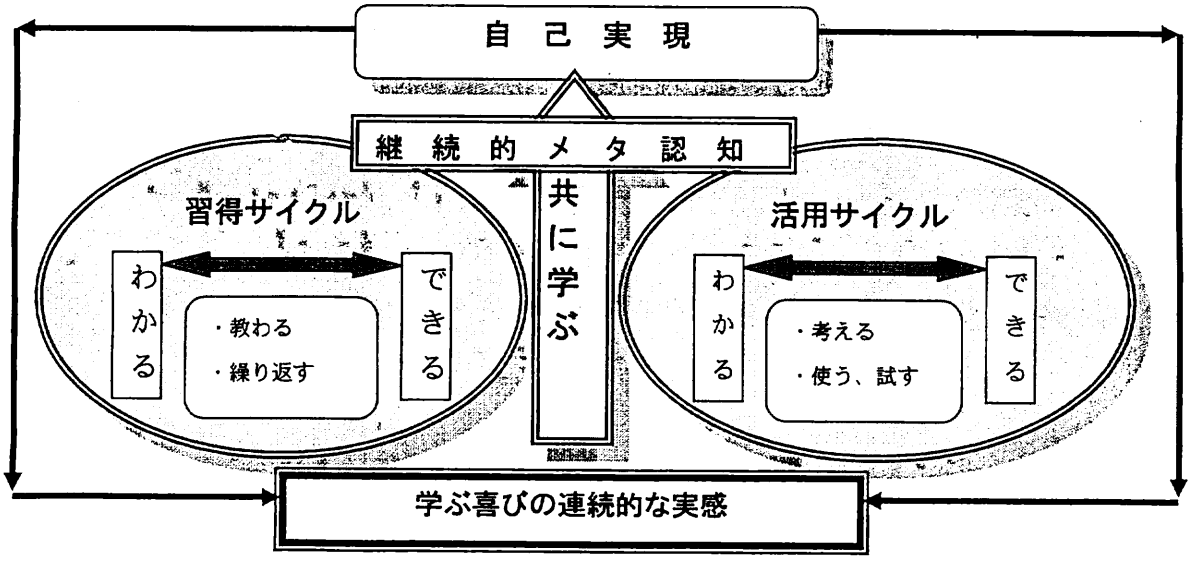
9 ヵ年を通して、子どもたちが目標や希望をもって生き生きと課題に挑戦し、自己実現していく活気のある授業が日常的に行われる小中一貫教育の究明

（１）目指す学校の総括テーマ

「学ぶ喜びを味わい、自己実現に向かう子どもを育てる小中一貫校

～「わかる、できる」「共に学ぶ」を実感できる授業を中心にして～

（２）総括テーマの構造



2　総括テーマに向けた９ヵ年を貫く授業研究課題

施設一体型の施設活用を基本に、下記の観点から授業研究を行う。
目指す子ども⇒○わかる、できるを実感する子ども○自学自習する子ども○かかわる子ども

（1）　９ヵ年を通した習得サイクルと活用サイクルを関連させた授業の研究

習得サイクルの形成 ⇄ **活用サイクルの形成**

必要な知識・技能をしっかりと教える。練習させる。

めあて、まとめ、交流のある学習

獲得した知識・技能を使って問題を考える。克服する。

経営基盤⇒○学習規律、学習態度、学びの方法が９ヵ年を通して連続・発展していること
　　○人間関係、社会性が育つ特別活動や道徳教育が９ヵ年を通して充実していること
学習基盤⇒○めあて、まとめ、交流のある学習が習得・活用型に応じて展開されていること
　　・学年ごとに連続・発展していること（９ヵ年の系統がある）
　　・教えること、考えることが関連性と発展性をもって明確に展開されていること

（2）メタ認知能力を育成する授業の研究

自己の目標達成に向けて何をいかにすべきか　自己の伸ばし方（自己成長）を認識する力を９ヵ年通して育てる！

（1）　めあてが自分のものになっていること⇒必要感や切実感、達成のイメージがあること
（2）　めあてに対して何ができたのか、何が分かったのか、何が課題なのか振り返りがあること　＊追求の結果だけでなく　追求の経過に関する振り返りがあること
自己評価活動の重視⇒①内容の振り返り、②自分自身の学び方、かかわり方の振り返り

（3）学習の継続意志につながる関心・意欲・態度を９ヵ年通して育成する授業の研究

内容関与・自律的動機

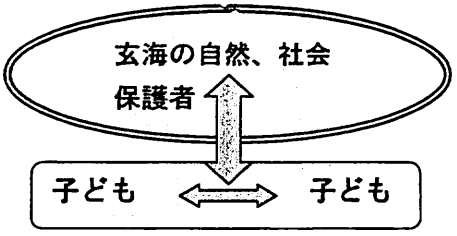
- ○　学習自体が楽しい（充実志向）
- ○　学習や生活に生かすため（実用志向）
- ○　知力を鍛えるため（訓練志向）

⇒ **学習の継続意志に影響する！**

（4）地域、保護者とかかわり、友だちと共に学ぶ（かかわる）授業の研究

共に学ぶ（かかわる）授業の類型

①　地域、保護者、友だちの情報を知る授業・・・・受信
②　地域、保護者、友だちに情報を届ける授業・・・発信
③　地域、保護者、友だちの力を活用する授業・・・活用
④　地域、保護者、友だちと共に創り上げる授業・・協働



3　授業研究を支える経営研究課題

９ヵ年を通した経営方針をもとに、職能としての経営力・指導力・組織力の向上、そしてやる気につながる小中一貫教育の経営研究を行う。

目指す教師像⇒自分（たち）でする、できる。 ⇒ 自律と自立

かかわりを広げ、深める。 ⇒ 協働と協同

① 授業づくり研修が、校区全体の研修組織と本校の研修組織とが無理なく連動しあう組織のあり方
② ９ヵ年を見通した子どものゴール像が明確で、授業の基本的な流れを全教師が押さえる組織のあり方
③ 研修組織の提案が各学級で実践され評価を経て改善されていく組織のあり方
④ 地域、家庭の教育力を活用、相互に高めあうことができる組織のあり方

小中一貫教育の効果（教師への信頼感も含む）が実感でき、授業改善への意識、よりよい授業を行おうとするやる気が高まっている協働意識の高い組織

小中一貫教育推進構想に取り入れる研究内容

内容１　９ヵ年で育てる子ども像：１５の春を迎える子どものイメージの具体化

A 最終イメージに向かう前期・中期・後期及び各学年で求める児童生徒像とは

B 小中一貫教育推進する教師像、保護者、地域像とは

内容２　推進構想の内容設定とその方策化

（１）　校内推進組織の構成とマネジメントサイクルの構築、地域、家庭等との連携組織の構築

① 校内組織と校区内組織、保・幼連携組織が無理なく整合、連動している。
：前期、中期、後期会議、教科領域別会議、保・幼との連絡会、等

② 小中一貫教育の評価が子どもの意識や学力、職員、家庭・地域の観点から行われている。

③ 家庭・地域への啓発、家庭・地域自身にも教育力を高めるシステムがある。
○小中一貫教育だより　○学校運営評議委員会　○学習のきまり定着への働きかけ
○地域コミュニティーとの合同会議　○PTA による家庭教育力アップ講座開講　等

（２）　９ヵ年の地域カリキュラム作成

① 校内施設の特色を活用した内容

② 校区の特色（学校施設の位置関係、地域文化、伝統、共同行事等）を生かした内容

③ 体験活動を重視した内容、地域や家庭の教育力を活用し伸ばしていく内容

④ 道徳や特別活動の機能が教科等学習や日常生活に生かされ連動する内容

（３）　授業者の弾力的な配置計画と運用

① ９ヵ年を見据えた総合的な教科担任制の導入　②学力向上支援教員との少人数指導の展開等

③ 地域人材、保護者、福岡教育大学生、教育委員会職員等の授業参画

（４） 学級経営の目標を達成する日常の学習指導の基盤づくり

学びの基盤の連続性（育て方）・・言い換えれば教師の指導基盤の連続性

A 学習規律⇒９ヵ年を通して、全員が同じ規律を身につけておくこと

⬇Ａ良い姿勢を保持する　　Ｂ学習用具の準備をきちんと行う　　Ｃ時間や時刻を守る

B 学習態度⇒前期、中期、後期を節目にして発展、変化させていくこと

Ａ学習ルール（発言、挙手等意思表示の仕方）　　Ｂ聞き方・話し方

C 学習方法（特に、考え方、調べ方、話し合い方、めあて・まとめまでの流れ等を重視する）

＊学年に応じて発展的・連続的に変化させ　年間を通じて定着を図る

（５）人間関係や社会性が醸成される学級・学年経営のあり方、研修の重点

① 集団の目標に向かって、一人一人を導く経営

② 自分と相手の良さを認め、伸ばしていく経営

③ 相手の立場や考えを尊重する思いやりのある経営

道徳教育及び特別活動を充実させる。特に、道徳の時間と学級会活動について重視するとともに他の教育活動との関連を図る

- **生徒指導の３機能を生かした学級づくり、授業づくりを推進する。**
- **生徒指導上の情報交換を密にする校区生徒指導委員会の充実**
- **人権・同和教育研修の充実**
- **いじめ、不登校問題、特別支援教育の研修の充実**

（６）小中一貫教育の土台となる家庭、地域との連携の仕方

○小中一貫教育だより（仮称）の発行

○学校運営評議委員会の効果的な展開

○学習のきまり発行とその定着による家庭での学習基盤、生活基盤の向上

○PTA 自身、地域コミュニティー自身による研修会、啓発会議等の実施

教師の経営力を高める組織的活動の研究

①経営方針を職員に周知し、日々のかかわりの中で経営参画意識を高める研究

②9 ヵ年を見通した経営方針が明確で、学級や学年で共通して行うことを全教師が押さえていくシステムの研究

③施設一体型の特色を生かした小中一貫教育に関する役割意識が明確で、日々の経営で実践されるシステムの研究

④経営について授業展開と関連させながら経営評価を主体的に行い、管理職及び組織から適切な評価を行う研究

⑤子どもも職員もやる気になる評価研究

例⇒・結果とねうちを区別する　・昨日と今日を比べる　・事実を真実にする。

小中一貫教育の効果（子どもたちの自立、協働の心の高まり等）が実感でき、学校経営参画意識の高まりや参画する喜びを味わっていくシステム構築の研究

２．２つの研究課題を支える校舎の特色・・・小中一貫教育推進を実現する校舎配置

（１）小中一体型学習、交流施設の特色

児童生徒が９ヵ年を通して、自己実現に向かう学習や生活空間が保障された明るく、機能的な学習施設

○小中の児童生徒が共用する施設の設置

A ランチルーム

- 児童生徒席１００席分のスペースを利用した、前期、中期、後期の児童生徒の合同給食の場
  ＊食事、交流・休憩、学年集会、地域活動等の生活・活動の拠点として、多目的に利用
  ＊集会、発表、掲示のできる機能

B 多目的ホール

- 多様な学習形態を可能にする空間
- 児童生徒が相互に交流できる空間
- 地域、保護者、学校が交流できる空間

C メディアセンターの設置

- 学習と生活の中心として、小中が一体利用できる、学校図書館・コンピュータ・メディア教室・学習室を備えた「メディアセンター」
- 学習、リソース、雑誌、ベンチ、視聴覚、読み聞かせや会話のコーナー等、様々なコーナー・居場所をつくり、小中児童生徒の生活の拠点となるようにする。
- コンピューターを用いた様々な学習活動が展開できる小中の多目的学習空間として捉える。
- サーバ室・準備室等のスペースを配置し、情報管理のセンターとする。

D 廊下・階段の特色

- 移動を通じて学校全体の様子が把握でき、また、発見があるような工夫を行う。
- ベンチのある談話コーナー、掲示コーナー、テラスやバルコニーの設置

（２）小中一体型管理諸室の特色

・管理諸室は、小中の職員の日常的な交流、連携が図れるとともに、グラウンドやアプローチに面し、学校全体の様子が把握できる位置にある。

○小中学校教職員の連携を促進させる管理施設

A 小中一体の職員室

- 前期（1~4年）中期（5~7年）後期（8~9年）ごとにまとまりのある机配置
- 連携が日常的に図れる２つの打ち合わせコーナーと職員交流を促進させるリラックスコーナー
- 会議室、相談室を隣接させた機能的な空間

B　小中連携教員室

・小中の教職員による日常的・定期的な情報交換、連携会の場とする。

C　小中一体の事務室、保健室

・事務室内に小中連携コーナーを設け、小中連携関連の資料スペースコーナーを確保する。 ・保健室は健康センターと位置づけ、その存在が常に意識され、誰でも行きやすいようにする。 ・保健室周辺には、健康に関する掲示ができるスペースを用意する。

（3）その他の特色

①自然環境と調和し、環境を生かした一体感のある学習や生活ができる校舎

○隣接する里山を保全し、学校林などとして活用する。

○既存樹木はできるだけ残し、緑の学校環境づくりにつなげる。

○釣川と東側の里山を結び、敷地内を回遊する遊歩道（グリーンベルト）がある。

○中庭を中心とした静かな学習ゾーンと、運動ゾーンを設定している。

○中庭などの外部空間を確保し、屋内外が連続した学校生活が送れる。

②地域利用・管理のしやすいゾーニング

○教室・管理諸室等の学校専用施設、体育館・多目的ホール等の学校時間外に地域利用が想定される施設を明確にゾーニングしている。

○ゾーニングされた各施設は、相互に視覚的連続性を持たせるとともに、交流空間を配置し、相互の交流・連携が図れるようにする。

○障がいのある人や高齢者にも利用しやすいバリアフリー

③選択可能な多様なトイレ

○トイレは小中学生の体格・心理状況等に配慮し、充分な広さの個別のブースとし、ブースごとに換気設備を設ける。また、トイレの入口はドアを無くすとともに、中が見通せないように迷路状にすることにより、入りやすく気配が感じられるようにする。